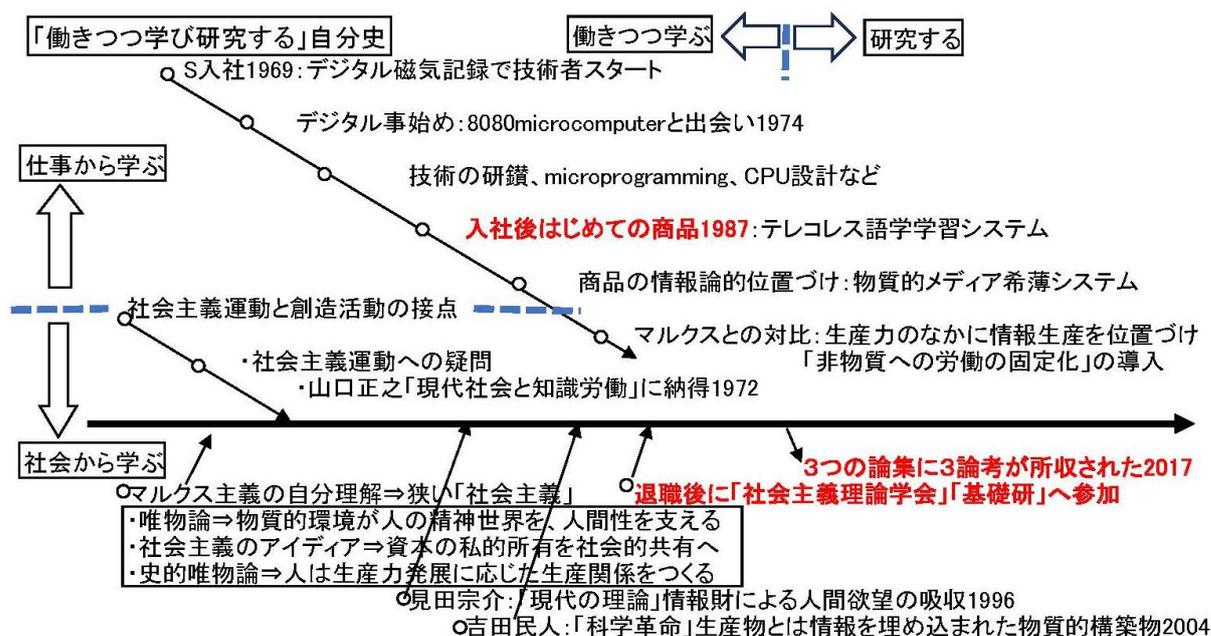


# 論文執筆に至る具体的コツ

平松民平

## 1 はじめに 一私が論文執筆に至るまでの（人生！）体験

上は技術者としての技術者人生、下は技術以外のことも考えていた人生を描いている。



小論で述べることは、次の3点である。

- ① 動機とコツ。
- ②モノづくりと論文づくりの違いと類似。
- ③論文の表現様式

## 2 論文づくりの動機とコツ

### 2.1 論文づくりの動機

モノ作り技術者だった自分がどうして論文を書くことになったのか。企業に入社以来、定年まで電子技術者として「モノづくり」が仕事だった。モノづくりを通して、「モノづくり」の「モノ」は情報部分と物質部分から成っていて、それらを生産する労働も情報に固定される労働と物質に固定される労働に分けられる、という事が分かった。それはマルクスの言う「生産とは物質的モノへの労働の固定」では情報の生産を説明しきれない、情報の居場所がない、という疑問でもあった。マルクスの中に情報を体系的に位置づけられないものか、そんなことを考えている間に定年が近づいて、自分の技術者寿命の限界と終わりをも実感することが多くなった。

しかしこの実感は生産力発展による「納得できる失業」と諦め、「納得できる失業」を受け入れて、自分の技術者としての蓄積を生かす道として、「モノづくりから論文づくり」へシフトする土台になった。幸いなことに、マルクスの理論の中に自分の技術者経験から見出

した未踏の(?) 隙間がある、自分の生きる道がある、と考えることができたのでシフトはスムーズだった。情報を新しい生産力要素として「マルクスを現代につなぎ—現代を社会主義につなぎ」媒介として探求する仕事がある、と自分に言い聞かせて、モノづくりから論文づくりへ「人生の仕事 (work)」をシフトすることが自然にできた。

## 2.2 論文づくりのコツ 10 点

- ①見かけ上無関係なもの間の類似性を見つけ、両立しがたいものを統合するのが創造。この逆、一体化の中に異質なものを見出して分離することも創造のネタの原料づくりとして重要。創造活動は二つの逆行する活動を含んでいる。他者の労働の成果を分離し統合する。これはマルクスでは「労働の結合」であり、「生産力の創造」と捉えられている。
- ②「論理を詰めること」と「ものの見方を突然、急激に転換すること」の両方の思考が必要。後者は誤りのリスクはあるが、推論による類似と異質の発見となって創造活動には重要。
- ③「当たり前と思って探求しない心 (泥み、なずみ) から脱することが大切。枯れ木に花が咲くのに驚くなら普通の木に花が咲くのを不思議に思うべき」三浦梅園 1780 のコトバ
- ④思いついたアイデアは一晩寝かせ、時間でろ過させ、不純物を除去し発酵させる。さらに他者のアイデアのシャワーで自分のアイデアのぜい肉を落とす。
- ⑤アイデアは散逸しやすい。生まれ出たアイデアは揮発しないうちに伏流水として地下水路に流す。一定の深さに達すれば自分の中の他の水脈と合流して新しい流れとなる。出番が来たら掘り出して使うから見失わないように。松任谷由美のコトバ。
- ⑥最も得意な分野で最も後れをとる、これはよくあること。外が見えないくらい集中しないと深くは掘れない。けれど外界が見えなくなる、結局、後れをとることになりがち。深く掘ることと自分の位置を常に確認する、両面を忘れずに。
- ⑦歌舞伎では「型を十分マスターした者だけがその型そのものを打ち破ることができる、型破りとはこのこと」と言う。型は学習され、否定され止揚される、進歩は弁証法的である。
- ⑧量質転換も重要。量的変化が一定の値を超えると、使用価値に質的な変化をもたらす。情報量の 100 倍の差が音声と映像を分け、豊富なコトバが簡潔な句や詩を、貧弱な語彙が冗長な文を、データの蓄積が新しい解釈と視点を生む。量的変化は価値の質的变化の根源。
- ⑨階段を上ると踊り場に達する。踊り場は一旦到達すれば失われない基盤で、次の飛躍への土台。地道な努力で階段を登り続け、量的蓄積に達すると次の踊り場が現れ、新しい土台となる。自分が踊り場なのか階段の途中なのか、今何を努力すべきかが居場所で決まる。
- ⑩自己の論はバグが見つかるまでの仮説にすぎない。自己を否定する反証「あるはずのものがない、ない筈のものがある」は進んで探し、自己を守るために反証を拒否する姿勢になってはいけない。反証なければ進歩無し。

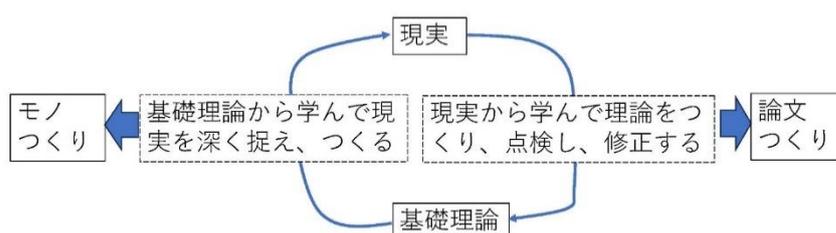
## 3 モノづくりと論文づくりの違いと類似

3.1 モノは、実体化したアイデアだから、「資本主義的合理性+自然法則」に適合しなければ存在できない。資本主義的合理性とは市場で受け入れられ、利益を生むことで、この

合理性は時代に対応して相対的だが、自然法則との適合は超歴史的に絶対的で、モノづくりはこれに服する。モノは設計意図とは別に、自然法則に従って「設計通りに」動作し、設計が誤っていれば、誤った通りに動作する。優秀な設計者は自己の誤りの検出に鋭敏。

3.2 論文は、「物質世界に実体化する以前の思考」で資本主義的合理性や自然法則など客観的な点検を受けずに存在できる。点検は文化的社会的な基準によるもので、社会的基準は時代によって変化し、今日は拒否されても時代が来れば許容されるかもしれないし、反対の場合もある。誤り自体が無いことも重要だが、誤りを検出できる能力と自己を疑う姿勢と、受け入れられずとも自論を棄てずに維持し続けることも大切である。

### 3.3 「生き生きとした現実感覚と基礎理論のダイナミックな結合」は創造過程に共通



現実感覚は基礎理論を学んで深い認識へ、理論は現実からの点検を受けて修正／発展へ。この両過程がモノと、論文に結実

する。これは論文づくりでもモノづくりでも共通。

## 4 論文作成の基本と工夫 一主張、論文の表現様式

4.1 基礎研「時代はさらに資本論」に対して、いくつかの批判的アドバイスをいただいた。

「主題を文、コトバで言いきっていない。箇条書き的で、レジュメ風で読み手に対して一意に内容が伝わらない。概念の明確化や論理展開は文による表現が必須で、絵などでの視覚的表現は補助的にはあるけれど、論理的道筋を文で言い切る努力を省く代りに絵を使うことはダメ。論理関係の明確化は論文の生命で、例えば『ゆえに、しかし、かといって』などなど、接続詞によってはじめて可能になる、箇条書きや『⇒』では相互の論理関係は読者に委ねられる。書き手の主張を誤解の余地なく論理的に明確に記述すべき」もっともなアドバイスと今でも思っている。何か書くときはこれで自分の論を点検している。

4.2 しかし、補助的に絵を使うことは許されるし、積極的に勧められることもある。文は話しコトバが基本なので隣接する文の論理関係の記述には向くけれど、それは直線状の文の論理関係に限られる。文にはそのような制約がある。個々の独立した命題の記述は文によって言い切ることで、それら複数の文相互の論理関係は一次元的とは限らない。全体的関係を把握するには動的に立体的に表現するべきで、そこまでを文で言い切ると複雑で難解な文になりやすい。資本論も絵を使えば、と思える記述がある。当時の印刷技術は図形やイラストの印刷を可能にするリトグラフ実用化の直前だったからかもしれない。

4.3 論文が明確な起承転結のルールに従うことは不変的に必須だが、論理構造をより明確にする表現様式の工夫は発展されるべきである。コトバで言い尽くすこととコトバで表現しえないことを絵で描く、両者を結合したハイブリッドな表現は発展されるべきと思う。